はじめに

癒しをあたえてくれる存在。

安産の守り神。

人間のよきパートナー。

これらは、「犬」という動物を指して、人間である私たちがよく使う表現です。長い付き合いのなかで、犬から感じたり、犬を見つづけたり、犬と触れ合ったりして得られた、犬の特質が、これらの表現に凝縮されています。

私はこれまで、家での飼い主として、犬たちから多くの恩恵を得てきました。また、動

物の研究者として、犬たちのことを長い時間をかけて客観的に見つめてきました。ご縁あって、これまで犬についての本も多く出すことができ、犬という動物の特性をさまざまな人に知っていただくことができました。

みなさんも、犬との距離はさまざまでしょうが、直接的あるいは間接的に、犬から得てきたことがあるのではないでしょうか。飼育したり、ブリーディングとよばれる繁殖のための活動をしたりして犬と直に接している方々は、犬の豊かで深みのある表情、体の温もり、そして、惜しげもなく注いでくれる愛に、多くのことを得てきたものと思います。犬を飼育したり、ブリーディングのための活動をしていない方々も、街なかでパートナーと散歩中の犬を見たり、テレビやユーチューブを通じて犬を見たりして、愛くるしい行動に癒されていることと思います。子どものころに犬に手を噛まれるなど嫌な思いをして、犬が嫌いになってしまった方もおられるでしょうが、そうした方の経験も含め、私たち人間が犬から得られるものはじつにさまざまです。

19世紀初頭のスコットランドで活躍した詩人・作家のウォルター・スコットは、旅先で犬と出会い、のちの『ガイ・マナリング』という小説作品のなかに6頭の犬を登場させました。犬から多大な影響を受けたスコットは、「犬の寿命が短い究極の原因を考えてみた

ことがある。それはきっと人間への同情からにちがいない。なぜなら、知り合って10年か12年で犬を失うことをあれほど苦しむのなら、犬がその2倍も生きたとしたら、人の悲しみははかり知れないからだ」と述べています。人間がいかに犬から影響を受けているかを象徴する言葉です。

多くの恩恵的な影響を私たちにあたえてくれた犬が、じつは日本から姿を消そうとしているのです。このように聞いたら、みなさんは「そんなことがあるか」「大げさな言い方だろう」と感じるかもしれません。しかし、現実に、この本のタイトルでもある「日本から犬がいなくなる日」に向けてのカウントダウンは始まっており、まちがいなく進んでいます。

なぜ、日本から犬がいなくなるのか。その理由については、本編で詳しく述べたいと思います。ここではその一端として、犬の繁殖において人間の介在はとても重要なものであるが、そのしくみに破綻が生じてしまっているとだけ、述べておきます。

犬のいない日々を想像できるでしょうか。みなさんがそれぞれにこれまで感じてきた、犬からの影響をなにも得られなくなる日々です。ただ一つ得られるものがあるとすれば、

それは喪失感かもしれません。

２０２３年の現時点は、「日本から犬がいなくなる日」に向けて、その開始時点から数年が経ったところと捉えられます。このままの状況で進めば、日本における犬の飼育頭数は急に減っていき、２０３０年代には「日本から犬がいなくなる日」が現実味を帯びてきます。一方で、いまから状況を変えていけば、犬の飼育頭数の減少に、ある程度の歯止めがかかり、長年にわたり築いてきた私たちと犬との関係性を未来にかけても保つことができます。

この本は、多くの方々に、私たち人間が犬からいかに多大な影響を得てきたかをあらためて感じていただき、そのうえで日本における犬の飼育頭数が減っているという現状と、その原因を知っていただこうとするものです。そして、犬にとっての幸せとはどのようなものであり、人間が犬に対して、また私たち自身に対してできるのはどのようなことかをみなさんと考えようとするものです。

第１章「日本から犬がいなくなる」では、私たち人間がいかに犬との関係性を築いてきたかを紹介するとともに、犬たちが日本からすでに減りはじめている現状をみなさんと共

有します。

第2章「なぜ犬の飼育頭数が減ってしまうのか」はこの本の核心に当たる章です。この章で、犬の飼育頭数の減少の要因に迫ります。犬の繁殖に携わる多くのブリーダーが、その活動から離れてしまった経緯を追っていきます。

第3章「人と犬がともに過ごす豊かな生活のために」では、できるだけ犬の立場になって、犬たちの幸せとはどういったものであるか、また犬と私たちの豊かな生活のために、私たちはどのようなことをすべきか、私の考えを述べたいと思います。

日本の犬をめぐる現状を知っている方はもちろんのこと、初めて現状に触れるという方にも、できるだけ理解していただけるよう心がけました。ぜひ、多くの方に「日本から犬がいなくなる日」が近づいているということを知っていただき、私たちと犬の健全な関係性を続けていくためになにが重要となるかを感じとっていただければと思います。

2023年3月　林 良博

目次

はじめに …… 1

第1章 日本から犬がいなくなる

❶ 犬との生活が私たちにもたらしてきたもの …… 12
人類にとって、馬、牛、猫より古くからのパートナー …… 12
人間の子どもたちは、犬との触れ合いから「命」を学んでいく …… 20
犬との暮らしで要介護・死亡リスクが半減 …… 25
オキシトシンを介して生まれる正のループ …… 28
動物との直接的な関わりが人を癒す …… 30
「医者いらず」で医療費削減の恩恵も …… 32
文化人たち、犬を愛す …… 34

研究者としての歩みと、最愛犬との出会い …… 40
❷ **子どもが犬と戯れることができない国になる** …… 46
日本から犬が確実に減っている …… 46
飼育頭数の維持に必要な基準を下回る幼年比率 …… 49
変わらない猫、減りつづける犬 …… 51
2040年までにさらに46パーセント以上減少 …… 52
犬の減少、その遠因に人の減少 …… 55
犬を飼いづらい世帯の増加 …… 57
ロボット犬や輸入犬では代替できない理由がある …… 58

第2章 なぜ犬の飼育頭数が減ってしまうのか

❶ **ブリーダー業界の変化** …… 64

「商業ブリーダー」と「ファミリーブリーダー」 64
姿を消していくファミリーブリーダー 67
ブリーダーに影響をあたえた法改正の流れ 70
丁寧な繁殖の担い手たちが去った後 81
行き場をなくす14万頭の犬猫たち 86
❷ ブリーディングのルールの国際比較 90
海外での犬の飼育頭数はむしろ増えている 90
欧米の「規制なし繁殖」の要件 93

第3章 人と犬がともに過ごす豊かな生活のために

❶ 犬の幸せとはなにか 100
もし人類がいなくなったら、犬たちは…… 100

犬は人になにを望むか……103
犬たちの行動に影響をあたえているのは人間ばかりではない……111
人間によって担わされた純粋犬の役割……114
純粋犬も雑種犬も生命の宿る犬……116
引く手あまたの小型犬、肩身の狭い大型犬……121
自然の理に合っているか、自分の利だけを求めていないか……127
人と犬のあいだに結ばれた絆……131

❷ **人と犬の暮らしを維持していくために**……133
ファミリーブリーダー復活への道……133
適正な繁殖を続けるファミリーブリーダーへの支援……136
獣医師が犬の出産に立ち会う機会を増やす……139
ペット業界の自助と自浄も不可欠……141
「日本から犬がいなくなる」という危機意識の共有……144
犬を飼う自由とともにあるはずの犬を誕生させる自由……147

参考文献……149

９５２万６０００頭に対し、犬の飼育頭数８９２万頭となり、猫が犬を上回りました。２０２２（令和４）年では、猫８８３万７０００頭に対し、犬７０５万３０００頭なので、逆転してからの差は開いています。

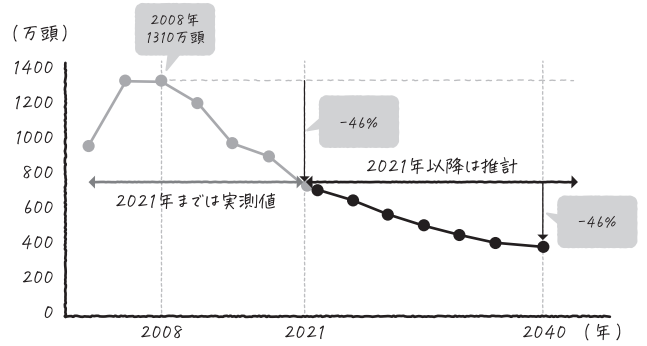
犬・猫それぞれの数値の推移や変動の理由については、これからお話ししていきます。ここではまず、「猫の飼育頭数は変わらないのに、犬の飼育頭数は減りつづけている」という現状をお伝えしておきます。

――２０４０年までにさらに46パーセント以上減少

犬の飼育頭数の減少傾向がもしこのまま続いていったらどうなるでしょう。

当然ながら、減少に歯止めがかからず、どんどん日本から犬たちが姿を消していくことになります。

犬猫適正飼養推進協議会という団体があります。「犬猫が快適に暮らせる社会の実現を目指します」というビジョンを掲げており、動物の販売、保管、貸出し、訓練、展示、競



出典：2002-2021年：ペットフード協会、2021-2040年：2021年環境省令数値基準（ブリーダー1人15頭）に基づく推計

2040年には、2021年からさらに46%減ってしまう

りあっせん、譲受飼養を業としておこなう法人・個人を指す「第一種動物取扱業」の取り組みについて、自主的な管理を推進するため、海外の規制・指針などの調査、犬猫の飼養管理に関する国内の実態調査、また、犬猫の飼養管理に関する倫理の醸成などをはじめとする事業をおこなっている団体です。会員にはペットフード協会のほか、この本で今後お話しする、ジャパンケネルクラブ、また日本獣医師会など6団体がなっています。

犬猫適正飼養推進協議会がおこなっている推計によると、2025年、2030年、2035年と犬の飼育頭数は減りつづ

け、２０４０年には、すでに飼育頭数が減っている２０２１年とくらべても、さらに46パーセント減少するという予想です。

つまり、いま日本で見られている犬の飼育状況が、２０４０年には半分ほどになってしまうということです。いま社会に犬が10頭いるところが、5頭強くらいまで減ってしまいます。過疎的状態といってよいでしょう。減少の要因に対策を打たなければ、２０４０年以降も犬の飼育頭数は減りつづけ、「日本で犬を見かけることは本当にめずらしいことになってしまった」といった未来社会になりかねません。

犬を飼っている方々のほとんどは、犬を飼うことに喜びや幸せ、また得られるものがあるからこそ飼っていると思います。嫌な体験を得ようとして飼いはじめる人はいません。たとえ、嫌だけれど犬と過ごさなければならないという人も、犬と過ごしているうちに、知らなかった犬の魅力を感じられるようになり、飼う前には得られなかった心の豊かさや学びを得られることと思います。

人と犬の、飼い主と飼い犬としての組み合わせ。その一つひとつに、その組み合わせにしかない経験や物語があるはずです。

いま10世帯に1世帯くらいの割合で、私たち日本人はそうした経験や物語を築いている

ことになります。これが、２０４０年に半減し、以降さらに滅亡的になっていくとしたらどうでしょう。日本人がこれまで大切にしてきた犬を飼うという習慣や文化が大きく衰退することになりかねません。危機はすでに始まっています。

――犬の減少、その遠因に人の減少

どうして日本から犬が減っていくのか。その核心的といえる要因については、次の第2章で見ていきたいと思います。ここでは遠因的な要因を取り上げてみます。

さきにも述べたように、少子高齢化にともなう人口減少が日本で進んでいます。これが犬の飼育頭数の減少につながっているということは、遠因的な要因として大いに考えられます。つまり、日本人が減っているので、犬を飼う日本人も減ってきており、飼われる犬の数が減ってきているということです。

日本の総人口は、２００８（平成20）年に約1億２８０８万人となり、ピークを迎えました。その後は一度も前年を上回ることなく、人口が減りつづけています。２０４８年には人口1億人を割り込み、今後１００年間で５０００万人前後になる、つまり明治時代後期

ごろの水準になるという予測があります。20世紀にものすごく人口が増え、21世紀にものすごく人口が減る、その急激な変化のなかに私たちはいるのです。

人口が減る一方で、65歳以上の高齢者の数は今後もしばらく増えていきます。総務省統計局の統計によると、２０２２（令和４）年の日本における高齢者数は３６２７万人で、１年前より６万人増えています。２０４２年にピークがくるとの見通しがあり、その時点では３８７８万人になると予測されています。

高齢者の方々のなかには、定年退職などで本業をリタイアされて、比較的時間に余裕をもてる人は多いかもしれません。私も２０２１（令和３）年３月に、８年間の任期を終えて国立科学博物館の館長を退任し、館長だった時代よりは時間をもてるようになりました。

日本の人口が減ってしまうとしても、時間に比較的余裕のある高齢者の人口はしばらく減らないので、高齢者が犬を飼うことで飼育頭数が維持されるという可能性はないでしょうか。

この可能性については、ある程度の期待をもてそうです。しかしながら、80歳を過ぎるとペットを飼う人は急減してしまうため、その期待は限定的かもしれません。東京都健康長寿医療センターなどの情報を総合すると、80歳を過ぎるとペット飼育率はほぼ半減する

状況がうかがえます。

―― 犬を飼いづらい世帯の増加

もう一つの犬が減る遠因的な理由として、共働き世帯の増加がありえます。昼間などに犬の世話をできる人がおらず、犬を飼いづらい世帯が増えたというわけです。総務省統計局の「労働力調査特別調査」と「労働力調査」によると、「雇用者の共働き世帯」の数が、「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」の数を上回ったのが１９９２年。その後また下回った年もありましたが、１９９７年以降はずっと「雇用者の共働き世帯」が上回り、差は開いています。２０２２年には、「雇用者の共働き世帯」は１２６２万世帯に対し、「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」は５３９万世帯となりました。

さきほども述べたとおり、犬には日々の散歩が必要です。自立度が高い猫よりも、飼うのに手間のかかる動物であることはまちがいありません。その手間をかけることに、飼い主としての喜びを見出している人もまた多くいるわけですが。社会構造が変化することにより、犬を飼いづらい状況が増えてきているというのは、犬の飼育頭数が減ってきている